

令和 3 年 6 月 3 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K01025

研究課題名(和文)近代アメリカ史における新史料とアトランティック・ヒストリー

研究課題名(英文)New Historical Documents of Modern America and Atlantic History

研究代表者

和田 光弘(Wada, Mitsuhiro)

名古屋大学・人文学研究科・教授

研究者番号：10220964

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、アメリカ史における最新のアプローチ、アトランティック・ヒストリー(大西洋史)の有用性を新史料に基づき実証するとともに、かかる共同研究を通じて、東海地区の主要国公立大学3校のアメリカ史研究者間のネットワークを構築しようとするものである。本研究では大西洋史の理論的彫琢を深めるため、大西洋史研究の泰斗M・レディカー教授と連絡を密にするとともに、研究代表者・研究分担者がそれぞれ担当するテーマのもと、当該アプローチを援用しつつ、独自に米国の市井より入手して私蔵している未刊行手稿史料のオリジナル等を中心とする一次史料の読み込みと分析をおこない、アトランティック・ヒストリーの実証的な深化を試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究においては、文書館等に収められていない新たな史料の「発掘」、入手、翻刻、紹介の試みを積極的に実践し、さらにアメリカ史における新たなアプローチたるアトランティック・ヒストリー(大西洋史)の視点を加えて分析することで、外国人研究者としての可能性の範囲を広げ得たと考える。その際、東海地区3大学の初期アメリカ史研究者がともに課題に挑み、文献収集の効率化なども含めて連携を推し進めた。また、大西洋史研究の第一人者M・レディカー教授を招聘して公開講演会を開催し、アトランティック・ヒストリーの成果を広く社会に還元するとともに、研究代表者は岩波新書を上梓して、当該アプローチの有効性について啓蒙に努めた。

研究成果の概要(英文)：In this joint research project, the project members aimed to utilize the perspective of Atlantic history, the latest and popular approach in the field of American history, and establish the research network of early Americanists among the national and prefectural universities in the Tokai region. While referring to the general guidance by the most prominent Atlantic historian, professor Marcus Rediker (distinguished professor at the University of Pittsburgh), each member pursued his or her own research project, examined and analyzed unpublished manuscript documents, some of which are privately-owned by members. In doing so, we tried to substantiate the validity of the Atlantic historical approach.

研究分野：アメリカ史

キーワード：アメリカ史 アトランティック・ヒストリー 大西洋史

1. 研究開始当初の背景

(1) グローバル化が進む昨今、アメリカ史研究においても、海や国境を越えるヒト・モノ・カネ・情報等の研究が重視されるに至っている。大西洋を囲む4大陸の相互連関を考究対象とするアトランティック・ヒストリーのアプローチは、まさにその動向の頂点にあり、いわゆるグローバル・ヒストリーとの親和性も強い。本研究はこの最新の枠組みのもとに、新史料の「発掘」と分析を推進しようとする野心的な試みである。以下で述べるように、アトランティック・ヒストリー(大西洋史)について様々な形で研究・紹介したり、関連の研究書・訳書を上梓したりする中で、新史料の一層の「発掘」や分析を通じて外国人研究者としてオリジナルな貢献が可能となるのではないかと考えたこと、さらにその際、東海地区の初期アメリカ史研究者がともに課題に挑むことで、地域の大学間の連携が進捗し、文献等の「共同化」による所蔵文献・史料の重複の回避など、より効率的に成果を上げようのではないかと考えたことから、本研究の立ち上げを構想した。

(2) 大西洋史の全貌は、その来歴と現状を体系的に論じたバーナード・ベイリン『アトランティック・ヒストリー』に余すところなく開陳されており、同書の邦訳は、研究代表者の和田が中心となって2007年に名古屋大学出版会から上梓した。令名高いアメリカ史家で、本研究の開始時点では存命であったベイリン(ハーヴァード大学名誉教授)は大西洋史国際セミナーを主催し、大西洋史の推進に精力的に携わっている。一方、大西洋史のアプローチについては、その内容に即して様々な分類がなされており、とりわけマーカス・レディカー(ピッツバーグ大学卓越教授)による分類は重要なものといえる。しかしながら発展途上にある大西洋史の方法論やカバーする時代・空間についてはさらなる理論的彫琢・検討が必要であり、本研究計画においてレディカー氏と連絡を密にして研究の推進を考えたのも、そのためである。氏が主に研究対象とする船乗りや海賊など、これまでのナショナル・ヒストリーの枠に納まりきらなかった周縁的存在は、国境を楽々と越える大西洋史においては中心的なテーマの一つであり、その具体相は、氏の著書『海賊たちの黄金時代 アトランティック・ヒストリーの世界』(和田他訳、ミネルヴァ書房、2014年)に如実に示されている。本プロジェクトでは氏を招聘し、そのアドバイスのもとに様々な新史料の分析を進めるとともに、広く大西洋史のアプローチをわが国に紹介することを構想した。

(3) 和田はすでに上述の翻訳のほか、紀平英作・油井大三郎編『アメリカ史研究入門』(山川出版社、2009年)や幾つかのシンポジウムにおいても大西洋史の体系的な紹介をおこなっており、さらに近世大西洋世界の諸相について種々の新史料から明らかにした単著を上梓している(和田『記録と記憶のアメリカ モノが語る近世』名古屋大学出版会、2016年)。また、平成19~21年度と平成27~29年度の科研(いずれも基盤研究C)において、和田・森脇・久田・笠井俊和の研究グループが大西洋史の枠組みを援用しつつ研究を鋭意進めており(とりわけ後者の科研) 上述した和田などの単著の内容の一部は、当該研究に基づく研究成果といえる。本プロジェクトはこれらの研究成果の蓄積を受けて、焦点を一層、新史料の分析に絞ってオリジナルな成果を生み出そうとするものである。

2. 研究の目的

(1) 本研究における新史料の定義とは、市井から入手した、アーキヴィストの手を経ない「うぶな」史料(文書館等に収蔵されていない史料) すでに文書館等に収蔵されているが、これまであまり注目されていなかった、もしくは大西洋史的な視角では分析されてこなかった史料、を主として意味する。以下では、研究代表者(和田)の研究方法を具体的に記すことで、本研究課題の核心をなす学術的「問い」の具体相を提示したい。和田が研究の俎上に載せるのは、ジョン・モールトン船長(1762~1824)である。彼はマサチューセッツ州のニューベリーポートやウェナム等を拠点として、ニューヨークや南部のノーフォーク(ヴァージニア州)、チャールストン(サウスカロライナ州)、ニューオリンズ(ルイジアナ州)、またカリブ海域、西インド諸島のキングストン(ジャマイカ)、ハバナ(キューバ)さらには大西洋を越えてイギリスのリヴァプールやブリストル、ドイツのハンブルクやブレーメン等にまで交易の裾野を広げていた人物で、1812年戦争(米英戦争)中などは私掠船長として活動した経験もあり、「無名」でありながらも、近代大西洋世界の強固な紐帯、ネットワークを自ら体現した存在といえる。和田が本研究で扱う新史料は、このモールトン船長に関わる一連の一紙(単葉)文書群であり、その内の42点のオリジナルを和田が個人的に所有している。いずれもニューハンプシャー州のとある旧家から発見されたもので、複数回にわたって入手した(入手にあたっては、当然ながら代表者個人が費用を負担しており、科研費等は使用していない)。むしろ当該の文書群のすべてを手にしたわけではなく、少なくともさらに12点の存在が確認できるものの、他の個人所有となっている。これらの他にも十数点(ないし数十点)以上の文書が現存すると想定されるが(その一部は現在、確認できる) 本研究では和田が所蔵する42点を中心に、他の個人所有の12点の情報も加えた54点の文書群を史料集合とし、ジョン・モールトン船長関連文書と仮称したい。内容としては領収証、請求書、約束手形、為替手形、船員船客健康証明書など、同船長の活発な経済活動を反映したいわゆるエフェメラの類が多く、さらに興味深い手紙(妻への手紙、妻からの手紙)

も7点含まれる(さらに草稿1点も所蔵)。前述したようにモルトン船長はいわゆる「有名な」人物などではなく、地域である程度名を知られていたとはいえ、市井の無名の一個人に過ぎない。したがって本新史料も文書館等、公的な機関の所蔵とならず(さらにのちの時代の一族の文書で、セイラムのピーボディエセックス博物館に収蔵されているものもある)。それゆえ今回「発掘」されたこれら「うぶな」史料は、直截な形でこの市井の個人の声をわれわれに伝えてくれる。本来このような個人史こそ、社会史が扱うべき対象に他ならず、その研究に際しては、必ずしもアメリカのアーキヴィストの手を経た史料を用いる必要はない。むしろそうでないからこそ、生の「歴史の場」に踏み込むことができるともいえよう。むろんあくまでも限られた範囲内ではあるが、これまでも和田はこのような新史料(文書館等に収められていない、新たに「発見」された史料)の入手・翻刻・紹介の試みを積極的に実践してきており(アメリカの植民地時代・独立革命期の領収証・約束手形・為替手形・支払指図書・小切手・差押え令状・軍票等)。たとえば、その成果の一端は、科研費(研究成果公開促進費)を得て単著として公にしている(和田『記録と記憶のアメリカ モノが語る近世』名古屋大学出版会、2016年)。かかる営みを継続してゆくことで、外国人研究者としての可能性の範囲を広げたいと考えている。

(2) そもそも文献史料の場合、新たな知見を得ようとすれば、情報の「川」を遡って「源流」へと至る必要があるが、周知のとおり、その源流には文書館や図書館、博物館などが存在し、貴重なコレクションとして多くの文書を収蔵している。古代・中世の文書、そして近世でも17世紀頃までの文書に関しては、源流に厳然と位置するのは文書館・図書館等であり、たとえ個人のコレクションが散見されるとしても、存在自体が知られていない文書を新たに探し出すのは

むろん新たに発見・発掘される文書もあるが、きわめて困難といえよう。しかし18世紀、特にその後半以降の文書に関していえば、文書館・図書館を越えて、さらに「川上」に遡ることができる。すなわち市井に埋もれている種々の文書を探し出すことができるのであり、そのなかに本研究で扱う新史料も含まれている。むろんこの時期の文書であっても、政治史・制度史関連の重要なものについては、当然ながら文書館・図書館をその居としている場合がほとんどと言ってよかろう。しかし、とりわけ社会史・経済史関連の文書の場合、家系に代々伝えられているものなど、いまだ「発掘」の余地は大きい。本研究は、その「発掘」の成果に基づく独創的な試みと言える。また、アトランティック・ヒストリーの枠組みを全面的に援用したアメリカ史研究は、前述のように最先端の研究手法であり、かかるアプローチの有効性が実証されることで、諸要素の有機的関連を前提とする同様の研究を誘発する効果があるといえる。とりわけ本研究では、これまであまり使われることのなかった類の史料、なかんずく和田と森脇の研究においては、これまで文書館に収められることのなかった新史料を用いて研究を進めるため、新たな知見や史実が得られるものと期待される。そしてそれらの知見が大西洋史の視座から解釈されることで、より広い時間的・空間的な軸のなかで当該史実を位置付けることが可能になると考えられる。また、論文や著書による学術的な考究結果の公開に加えて、和田は、他の訳者とともに前述のレディカー教授の著書を邦訳しており、わが国の学界のみならず社会一般に対しても、アトランティック・ヒストリーの具体相や魅力を紹介してゆきたいと考えている。

3. 研究の方法

(1) 研究代表者、研究分担者は、それぞれの担当する研究課題を出発点として本研究のテーマにアプローチする。本研究では東海地区における共同研究という機動力を最大限に生かしつつ、地域・時代ともに一層幅広い個別事例を収集・分析し、そこから得られたより広いさまざまな知見を総動員してアトランティック・ヒストリーの視座の有効性を示してゆく。研究期間は、短期決戦の3年間である。主要設備としては、関連史資料の収集を鋭意おこない、この共同作業を通じて、東海地区の主要国立大学3校のアメリカ史研究者間のネットワークが構築され、関連文献等も重複なく充実させることが可能となろう。

(2) まず、研究代表者の和田は、大西洋史の諸相や史料に関する諸問題を総合的に考察し、本研究の理論的支柱を打ち立てるとともに、個別の適用例として前述のごとくモルトン船長関連文書の分析に邁進する。研究分担者の森脇は、ニューヨーク州マディソン郡サリヴァンの個人宅から発見された未刊行史料のオリジナル(森脇所蔵)を分析の俎上に載せる。これらの史料は、エリー運河の支線オネイダ湖運河(のちにエリー運河本線に組み込まれる)に関する82点からなる。当該史料はサリヴァンの有力者ゼブロン・ダグラス(1770-1849)が州議会における証言のためにまとめ、保管していたと考えられ、1800年代から1850年代に作成された書簡その他の文書が含まれる。ダグラスはこのオネイダ湖運河建設において、州政府への建設の請願から建設の受注にいたるまで幅広く関与した人物であり、運河建設の過程をたどることができる貴重な史料といえる。大西洋の彼方の市場へのアクセスがいかにして可能となったのか、とりわけアトランティック・ヒストリーの下位分類たる「シス大西洋史」(大西洋の文脈の中で特定の地域の史実を探究するアプローチ)の実践例となろう。研究分担者の久田は、ピーボディエセックス博物館の史料(乗組員の結婚証明書の他に、鯨油の販売先、アムステルダムでの鯨油価格、保険証券等)や、捕鯨業に従事する男性とその妻たちの手紙などを通じて、陸に残された女性たちの生活を明らかにしながら、マサチューセッツの捕鯨基地の経済的変容、大西洋経済における位置づけなどについて考究する。

(3) 令和元年度は、本研究のメンバーは引き続き各自のテーマに沿って研究を深化させる。研究代表者の和田は、大西洋史の諸相や史料の利用に関する諸問題を総合的に考察するとともに、

個別の適用例としてジョン・モルトン船長関連文書の分析に引き続き邁進する。研究分担者の森脇は、ニューヨーク州マディソン郡サリヴァンの個人宅から発見された未刊行史料のオリジナル（森脇所蔵）の分析を引き続きおこなう。研究分担者の久田は、1830年代の奴隷制討論禁止規則に関する考察をさらに深めるとともに、ピーボディエセックス博物館の史料の調査や、捕鯨業に従事する男性とその妻たちの手紙の分析などを通じて、マサチューセッツの捕鯨基地の経済的変容、大西洋経済における位置づけなどについて考究する。さらに加えて、19世紀大西洋世界に関する主要なテーマである奴隷制について米国において史資料を収集し、その分析を進める。なお、主要設備としては、後述のエヴァンズ・データベースの活用とともに、関連史資料の収集を継続する。この共同作業を通じて、東海地区の主要国公立大学3校のアメリカ史研究者間のネットワークが強固となり、関連文献等も重複なく充実させることが可能となる。

(4)最終年度の令和2年度は、総括を意識しつつ、引き続き各自のテーマに添いつつ研究を深化させるとともに、主として名古屋大学において会合を持ち、相互の研究成果の刷合わせを積極的におこない、最終的な成果の取りまとめにむけて議論を重ねる。主要設備としては、エヴァンズ・データベースの活用とともに、関連史資料の収集を引き続き進める。研究代表者の和田は、大西洋史の諸相や史料の利用に関する諸問題を総合的に考察するとともに、個別の適用例として、マサチューセッツ州イプスウィッチの地方名士ジョン・チョートのオリジナル文書（和田所蔵）の分析もおこない、大西洋史の下位分類たる「シス大西洋史」の具体相を明らかにする。研究分担者の森脇は、ニューヨーク州マディソン郡サリヴァンの個人宅から発見された未刊行史料のオリジナルの分析を引き続きおこなう。研究分担者の久田は、ピーボディエセックス博物館の史料の調査や、捕鯨業に従事する男性とその妻たちの手紙の分析などを引き続きおこない、マサチューセッツの捕鯨基地の大西洋経済における位置づけなどについて鋭意考究する。さらに19世紀大西洋世界に関する主要なテーマである奴隷制について米国において収集した史資料の分析を進める。また、全メンバーに関して、報告書作成のための基礎資料を充実させるため、収集したデータの最終的な整理・点検を網羅的に実施する。ただし実際には、新型コロナウイルスの影響で、予定していた米国での史資料収集が実施できなくなったことから、さまざまな方向転換を余儀なくされた。

4. 研究成果

(1)研究代表者、研究分担者は、それぞれの担当する研究課題について研究を深化させるとともに、3年間の研究の総括をおこなった。主要設備としては、引き続き名古屋大学・三重大学・愛知県立大学において関連史資料の収集を鋭意進めたが、とりわけ資料等の収集に関して本研究の最大の成果は、和田が中心となって、しかも本科研費を一切使用することなく、「初期アメリカ刊行物史料集成：エヴァンズ・データベース(America's Historical Imprints, Series I: Evans, 1639-1800)」を名古屋大学に導入したことである。このデータベースは、17・18世紀にアメリカで出版されたほぼ全ての刊行物を網羅し、大西洋史研究の重要な基礎資料となりえる。NII-JUSTICE 共同購入コンソーシアムに採択されていることも助けとなって、本学での導入を成功させたが、共同研究をおこなっている愛知県立大学、三重大学にとっても貴重な成果といえる。

(2)研究代表者・研究分担者は、それぞれの担当する研究課題を出発点として本研究のテーマにアプローチした。最終年度は、周知のようにコロナ禍のために、当初予定していた海外での調査が不可能となり、方向転換を余儀なくされた。にもかかわらず、研究代表者・研究分担者ともに、それぞれ対象とするテーマに切り込み、論文を上梓した。まず、研究代表者の和田光弘は、近代大西洋世界の強固な紐帯を体現するジョン・モルトン船長関連文書（和田所蔵）の分析を引き続きおこない、その成果を論文として公表した（「アメリカ建国期における或る私掠船船長に関する新史料についての一考察」『名古屋大学人文学研究論集』第2号、2019年3月）。さらに大西洋史研究の第一人者である米国ピッツバーグ大学卓越教授マーカス・レディカー教授を招聘して、大西洋史に関するさまざまな論点・議論を深めるとともに、公開講演会を開催して、大西洋史研究の成果を広く社会に還元した（「マーカス・レディカー卓越教授特別公開講演（特別ゲスト：ウェンディ・ゴールドマン・カーネギー・メロン大学卓越教授）名古屋大学、2019年3月）。和田が司会を務め、大勢の参加者を得て大変盛況であった。また、大西洋史や記憶史の視座も援用しつつ、初期アメリカ史の概説書、『植民地から建国へ 19世紀初頭まで（シリーズ アメリカ合衆国史）』（岩波新書）を著し、当該アプローチの有効性について広く一般への啓蒙に努めた。当該の書籍は令和3年度に入って『朝日新聞』の「天声人語」（7月6日）や書評欄（9月26日）で紹介されたこともあって、第4刷まで増刷され（12月）kindle版も出た。また、個別の適用例として、18世紀末にマサチューセッツ州イプスウィッチで死去した地方名士J・チョートの遺産競売に関する史料の分析を試みた。当該史料は米国のディーラーから和田が入手し（入手に際して科研費は使用していない）、個人的に所蔵しているもので、相続の際の検認手続きのために必要な、いわゆる遺産財団に属する家財の処分等に関して克明に記した報告書であり、これまでかの地の文書館等に収められたことのないオリジナルの史料である。当該史料の翻刻・分析をおこない、上梓した論文「建国期マサチューセッツの地方名士ジョン・チョートに関する新史料についての一考察（その1）」において種々の新事実を明らかにし、「シス大西洋史」につながる道筋を示した。

(3)研究分担者の森脇由美子は、ニューヨーク州マディソン郡サリヴァンの有力者ゼブロン・ダグラスの邸宅に残されたオリジナルの未刊行史料「オネイダ湖運河文書」（森脇所蔵）を俎上

に載せて分析を進めた。その成果は、「ニューヨーク州における市場革命と運河建設」(『論集(三重大学人文学部)』第18号、2019年3月)として公表した。さらに引き続き、同史料の調査を行うとともに、オネイダ湖運河およびゼブロン・ダグラスについてニューヨーク州議会などの公文書および19世紀に刊行された地方史などを渉猟して、「ニューヨーク州における市場革命と運河建設」『論集(三重大学人文学部)』第18号にまとめた。これにより、モホーク渓谷からオネイダ湖周辺にかけての地域の重要性が植民地時代より認知されていた事実を、先住民・フランス・イギリスの三者の関係や、入植直後の小規模運河の建設など、この地域の歴史を辿る中で明らかにするとともに、デジタル史料を含む種々の史料からダグラスの人物像にも接近し、農場経営に加え宿屋やターンパイク・橋梁の建設、さらには運河建設まで手掛ける開発業者となっていく企業家的入植者としての姿を捉えた。さらに、論文「19世紀アメリカのブラックフェイス・ミンストレル」を著し、人種差別や文化盗用として言及されてきた19世紀の大衆芸能ブラックフェイス・ミンストレルについて詳細な研究史的検討を行った上で、ナショナルな枠組にかわる大西洋史的視点からの分析を試みた。

(4) 研究分担者の久田由佳子は、米国において史資料を収集し、19世紀大西洋世界に関する主要なテーマである奴隷制について、その分析の基礎的作業を論文にまとめた(「1830年代奴隷制討論禁止規則の成立をめぐる アメリカ合衆国連邦議会における言論統制(1)」『愛知県立大学外国語学部紀要』第51号、2019年3月)。さらに大西洋史関連の主要な研究(笠井俊和著『船乗りがつなぐ大西洋世界』)の書評を執筆し(『西洋史学論集(九州西洋史学会)』第56号、2019年3月)、市場革命などに関する研究報告をおこなった(第52回アメリカ学会年次大会、2018年6月)。さらに、アトランティック・ヒストリー研究に携わるハーヴァード大学教授のD・アーミテイジと交流し、愛知県立大学でのシンポジウムでは、ハーヴァード大学教授S・ベッカーをゲストに迎えて、司会をつとめた。また、アメリカ経済史学会2019年度5月例会や、第7回プロジェクト研究会(東海ジェンダー研究所)において関連の報告を鋭意おこなった。さらに論文「奴隷制討論禁止規則とジョン・クインジー・アダムズに対する問責をめぐる(2)」において、1830年代に大西洋の対岸、イギリスに倣って展開された反奴隷制請願運動に対して、連邦議会下院で制定された「箝口令」に関する史料を分析し、当時、下院議員だったJ・Q・アダムズをめぐる動きを精緻に析出した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 和田光弘	4. 巻 第4号
2. 論文標題 「建国期マサチューセッツの地方名士ジョン・チョートに関する新史料についての一考察（その1）」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『名古屋大学人文学研究論集』	6. 最初と最後の頁 325-347
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 森脇由美子	4. 巻 第38号
2. 論文標題 「19世紀アメリカのブラックフェイス・ minstrel」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『人文論叢（三重大学人文学部文化学科研究紀要）』	6. 最初と最後の頁 65-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 久田由佳子	4. 巻 第53号
2. 論文標題 「奴隷制討論禁止規則とジョン・クインジー・アダムズに対する問責をめぐってーアメリカ合衆国連邦議会における言語統制（2）」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『愛知県立大学外国語学部紀要（地域研究・国際学編）』	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 和田光弘	4. 巻 2
2. 論文標題 「アメリカ建国期における或る私掠船船長に関する新史料についての一考察」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『名古屋大学人文学研究論集』	6. 最初と最後の頁 229-246
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 森脇由美子	4. 巻 18
2. 論文標題 「ニューヨーク州における市場革命と運河建設 ゼブロン・ダグラスの運河建設事業を手掛かりに」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『論集』（三重大学人文学部哲学・思想学系・教育学部哲学・倫理学教室）	6. 最初と最後の頁 67-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久田由佳子	4. 巻 51
2. 論文標題 「1830年代奴隷制討論禁止規則の成立をめぐって アメリカ合衆国連邦議会における言論統制（1）」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『愛知県立大学外国語学部紀要（地域研究・国際学）』	6. 最初と最後の頁 1-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 久田由佳子	4. 巻 56
2. 論文標題 「書評・笠井俊和著『船乗りがつなく大西洋世界 英領植民地ボストンの船員と貿易の社会史』」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『西洋史学論集』（九州西洋史学会）	6. 最初と最後の頁 50-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件／うち国際学会 1件）

1. 発表者名 久田由佳子
2. 発表標題 「1830年代マサチューセッツ州ローウェルにおける工場ストライキ再考」
3. 学会等名 アメリカ経済史学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 久田由佳子
2. 発表標題 「アメリカ女性史における「女性の領域」論再考」
3. 学会等名 プロジェクト研究会（東海ジェンダー研究所）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 久田由佳子
2. 発表標題 「19世紀ニューイングランドにおける市場革命と家事労働」
3. 学会等名 第52回アメリカ学会年次大会（国際学会）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 和田光弘	4. 発行年 2019年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 268ページ
3. 書名 『植民地から建国へ 19世紀初頭まで（シリーズ アメリカ合衆国史 ）』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

名古屋大学文学部・人文学研究科・西洋史学研究室・教員紹介・和田光弘教授
<https://www.hum.nagoya-u.ac.jp/doh/staff/page-wada.html>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	森脇 由美子 (Moriwaki Yumiko) (10314105)	三重大学・人文学部・教授 (14101)	
研究 分 担 者	久田 由佳子 (Hisada Yukako) (40300131)	愛知県立大学・外国語学部・教授 (23901)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会	開催年
「マーカス・レディカー/ピッツバーグ大学卓越教授特別公開講演(特別ゲスト: ウェンディ・ゴールドマン/カーネギー・メロン大学卓越教授)」	2019年~2019年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関